

河口慧海『西藏旅行記』の一景

―女難、あるいは色欲の問題をめぐって―

一條孝夫

はじめに

明治三十二年（一八九九）の二月一日ネパールの首府カトマンズに着いた河口慧海は、鎖国を続けているチベットに潜入するため当地にほぼ一カ月滞在している間に、チベットからやってくる巡礼たちを探りを入れ、関所を通らずに間道を行く道筋があるという情報をつかんだ。その後、ロー州のツァーランで十カ月ほど滞在し、チベット語や仏教を学ぶ一方、親しくなった村人らに気づかれないように間道を探索し、ついにネパールからヒマラヤを越えてチベットに潜入する確実な経路の発見に成功する。

ドーラギリ―雪峰の山北を横切ってトルボへ出てから道のな
い山の間を三日ばかり辿^{たど}って行くと、遊牧民の来て居る西北原
に出られる道筋があるという。仮^よし遊牧民が来て居ら^そいでも其
原^れから一日か一日半行くとゲロン・リンボチュエの居る所に出ら
れるというような話を聞きました。（一四）

慧海が執るべき道順として選択したのは、ロー州からチベットの西北原（チャンタン）に出て、さらに西北へ進んでマナサルワ湖とカイラス山を回り、ラサへ向かう公道に出るコースである。ところが、当の『西藏旅行記』（以下『旅行記』と記す）の記述では、トルボ以降、カイラス山をめぐりトクスン・ターサムに至るまでの具体的な道筋が意図的に省略されているため、慧海が実際に潜入した経路は『旅行記』中の〈最大の謎¹〉となっている。しかし、細部の道筋や地名が伏せられているからといって、彼が西北原に出て仏教の聖地であるマナサルワ湖やカイラス山などを一巡した事実は紛れようもない。

この道順では、ラサへ向かう公道に出る前に逆方向の西へ大きく迂回することになり、目的地であるラサへ行くには遠回りである。にもかかわらず、この道順を辿ったのは、遠回りをしないで間道を行けば、どこかで関所にひっかかる危険率が高いことが判明したからである。また、ようやく把握した確実な（しかし、人がめつたに

通らない) 間道を何の口実もなしに行けば、身辺に疑惑の種を残すことになることから、そうした疑惑を回避するために口実が必要だった。慧海が思いついたのは、(天然の曼陀羅) (九) 霊峰カイラス山への参詣という口実である。慧海の周囲には、その西北原行きに、行路難(食物の得難いこと、強盗に襲われる危険など)を説いて制止しようとしたギヤア・ラマのような人物がいたが、逆に彼を納得せしめたのは、どんな難儀を冒しても霊場に参詣したいという慧海の強固な意志であった。それがまんざらの口実でもなかったのは、慧海がもととヒマラヤ山中での仏道修行を切望し、その願望が(ヒマラヤ山道を越えて入蔵する主な原因) (一) であつたので、彼にとつて願つたりかなつたり道の程であつたからである。

間道の探索をしていたとき、慧海は西北原に出てから一日か一日半の行程で、当地の高徳の僧として知られたゲロン・リンボチエの住む岩窟に出られるという噂を聞き込んでいる。慧海はこの高僧を、後に(白巖窟の尊者) (二〇) と呼んで尊崇するとともに、多大な援助を受けることになる。ラサへ向かう前に、大きく迂回する聖地巡礼のコースを選択したため、往復の際に同じ道筋を辿るといふ必然から、慧海は尊者のもとを二度訪問する幸運に恵まれる。この偶然が、後述するように思いがけない人間模様で遭遇する契機となり、その往還で思わぬ女難に際会することにもなつた。慧海が辛うじて女難を脱してほどなく、尊者と宗教問答を交わしていたときに唐突に(これまで色欲のために心を苦しめた事)があるかと切り込まれ、

たじたじとなる場面がある。そのときは、(かつて大いに苦しんだ事がありましたが、今はどうやら免れたようであります。また全く免れん事を希望して居るものである) (四五) と応じて切り抜けるのだが、囚らずも返答が示唆するのは、仏道修行者としての慧海にとつて色欲がいかに難題であつたかという事実である。過去において苦しみ、現在は免れたようだが、以後は願い下げだといふのである。強靱な意志の人として知られた慧海の意外な盲点といふべきであろう。

仏教の修行者にとつて、しばしば精進の妨げとなる色欲の難題を慧海もまた免れなかつたとすれば、求道者河口慧海を考察する上で、『旅行記』中の女難の逸話を無視することはできない。彼にとつて女難、あるいは色欲の問題とは何であつたか。その問題を慧海の青春期から問いなおし、あわせて『旅行記』がもつ魅力の一面を見きわめたい。

1 なぜ旅行記か

『旅行記』の初出は、明治三十六年(一九〇三)五月三十一日から「大阪毎日新聞」と東京の「時事新報」によつて同時掲載された。連載の段階では、タイトルは固定していない。「大阪毎日」では「大秘密国の探険 西藏経歴談」、 「時事」では「世界の秘密国」(予告では「西藏国内探検談」)であり、当時重要な鎮国下にあつたチベットに

日本人として初めて潜入に成功した快挙は、世界の（秘密国への探検）を要請しているが、翌年これらの記事を（再集して）（序）博文館から刊行したときには、現行の「西蔵旅行記」に変更される。なぜ、探検記ではなく旅行記なのか。

慧海が本書から（探検）の語を排した経緯は、その「序」にあるように、（仏教未伝の経典）の探求こそ本願であって、（探検の功を全うし、広く世界の文明に資せんとの大志願ありしに非ず）という言葉に尽きているのだが、遺憾ながらうのみにはできない。一方で（探検家としての資格においては、ほとんど欠如せるものあり）と謙抑さを装いながら、ことチベットに関しては、（余にも耳目の明ありて専門の宗教上以外、社会学上に、経済学上に）、あるいは歴史・工芸から地理上の新探検・動植物の分布等に至るまで（見聞せるところも少なからざりしかば）という多方面にわたる強力な自負を認めることができるからである。何よりチベット潜入時を回顧して、（飢餓乾渴の難、渡河瀕死の難、雪峰凍死の難、重荷負戴の難、漠野独行の難、身疲足疵の難等の種々苦難）（三二）と自記する旅の実態は、太平楽な旅行などではなく、生死を賭けて未知の境を行く探検の日々であったことを明かしている。（旅行記より、冒険談、探検記というほうがより、ふさわしい）（傍点は原文）と評されるゆえんである。また、慧海は「序」で、チベットにおける（仏教の社会に及ぼせる勢力の偉大なる）、その古代における発達とは吾人の敬虔に値するものなきに非ず。この書この点において甚だしく欠けたり。これ余

の完全なる旅行談を誌さんと欲して努力せし所以）とも述べていて、チベット仏教への言及より（完全なる旅行談）を書くことを第一義としている。（完全なる旅行談）とは、紀行を物語ることを目的化することである。事実、慧海の単独行は当初から談話筆記の体裁をとって発表された。

二つの新聞で連載が始まったのは五月三十一日。慧海が帰国して神戸に着いたのが同月二十日であるから、口述筆記はその間に始まったと考えられる。（京都東山の某氏の別荘が提供され、速記者一人、画家一人、記者は一人から三人ずつ集まった。口述は毎日午前二時間、午後二時間、十八日間かかった）⁽³⁾ 由であるから、正味七十二時間という短時間で仕上げられたことになる。若い頃から能弁で知られた慧海が語り、熟練の記者がそれを記事にまとめたにせよ、記述の正確さや筆記の量を勘案すると、仕上げまでのスピードは驚異的と言わざるを得ない。⁽⁴⁾

初出を反映して慧海の語り口調を活かした談話体が採用されているためか、本書を（記録ではなく、チベットを脱出してぶじに日本に帰国してからの思い出話）⁽⁵⁾ と見る向きがあるが、全容はとりとめのない思い出話などではなく、むしろ精細な日記や周到なメモを前提する記録であることが、本文に残された痕跡から推測できる。⁽⁶⁾ 問題はその記録の所在である。かつて川喜田二郎が、河口正家で『旅行記』の（もととなった、克明できれいに書かれた日記を発見した）⁽⁷⁾ と報告し、青江舜二郎もまた、実際に見た（かなり大きなノートに

力強い細字でギッシリつめた横書き⁽⁸⁾の日記についてふれているが、その後日記は長いこと所在不明となる。ところが、平成十六年（二〇〇四）十二月、慧海の姪宮田恵美宅で、くだんの日記が再発見され、同月二十三日、日本山岳会関西支部などが大阪市内で内容を発表した。見つかったのは明治三十三年（一九〇〇）三月から十二月までの日記で、チベット国内へ潜入した頃からラサへ入る直前までの記録である。（B4判の罫線入りの紙33枚に細かなペン字でほぼ毎日書かれている⁽⁹⁾）という。慧海には、生涯を通じて日記を書く習慣があった⁽¹⁰⁾から、この外に、ラサに滞在中、あるいは帰国までの日記が実在した公算も高いのではないか。ここでは少なくとも、ラサへ入る直前までの日記の記事が（ほぼ毎日書かれてい）た事実を確認しておきたい。この旅日記が公開されれば、〈最大の謎〉といわれたネパールからチベットへの潜入経路の実際が明瞭になるばかりか、記事の取捨選択の程度や、日記から旅行記への飛躍の実態が明らかになるはずである⁽¹¹⁾。

「河口慧海に関する著作一覽」⁽¹²⁾に徴すると、慧海および『旅行記』研究は、一九六〇年代から急激に活発化し、地理学・人類学・仏教学・チベット学・自然科学等を中心に多くの成果をあげ、〈河口慧海学〉と呼ばれるような活況を呈している。『旅行記』に限定しても、これまでさまざまな視点から読まれてきたが、慧海が企図した〈完全なる旅行談〉の視点からの分析は少ない。『旅行記』の全容を大まかに部分分けすると、日本を出発しラサへ潜入するまで（一〜六三）、

ラサ滞在中（六四〜一二五）、ラサ脱出から帰国まで（一二六〜大団円）の三部構成になる。それぞれにスリリングな逸話が豊富に取り込まれ興味がつきないが、読後の感触は微妙に異なる。第一部の潜入行は、〈出来事と見聞観察をまず日記のように実際にあったことをそのまま〉再現し、第二部のラサ滞在中は、〈各種の民俗的観察を個々に取り上げ〉⁽¹³⁾、さながら民俗誌（あるいは民族誌）の外観を呈し、第三部の脱出行は、身分の露見によつてチベットやネパールの高官から一般人まで巻き込み事態がいやおうなく政治化したため、第一部のような単独行の魅力が薄れたかわりに、当時の大状況の緊迫感が濃密に浮上する。

こうした違いはともあれ、『旅行記』の語りには共通の特徴が見られる。日々の見聞や観察を（日記のように）語るだけでなく、そこに多くの韻文を挿入する形式が採られていることである。『旅行記』に記録された韻文の数は六三。内訳は、短歌が圧倒的に多く六〇首（友人島村清吉の短歌への返歌一首、狂歌一首を含む）、俳句一句、「チベット獄裡の友を懐う」という歌を含め長歌二首である。ちなみに、第一部に取り込まれた韻文は三五、第二部は七、第三部は二一。慧海の〈旅行談〉には、文芸意識が明白に働いている。このように旅の記録が日記と歌を合成する形式で書かれた文芸ジャンルといえ、鎌倉時代に成立した『海道記』や『十六夜日記』に代表される日記紀行文学に先例がある。慧海が何を範としたか詳らかにしないが、こうした先例をふまえて、旅行記という名の日記紀行文学を志

向したのは確かであろう。内実は探検記でありながら、旅行記の呼称に執心する理由もそこにある。

2 精進と捨戒

すでに伝説化しているように、慧海は釈迦伝を読んだのを機縁に、十五歳のとき（明治十三年十月二十五日）（信貴山の毘沙門天に満三カ年精進を続ける）願かけをする。精進の内容は、仏道を修めるといふ精神面より、（禁酒・禁肉食・不淫）という物質面が強調されているくらいがあるが、三禁を三年やり遂げた後、さらに七年延長する。十年後に精進を一度止め、ほどなく再開、二十七歳からは、午前中だけで午後は何も食べない非時食戒も始め、以後は八〇歳で亡くなるまで続けたといふ⁽¹⁴⁾。結果から見れば（十五歳の決意を、ほとんど生涯にわたってつらぬいた⁽¹⁵⁾）といえるが、ここではその裂け目、精進生活を一度止め、ほどなく再開するまでの休止期間に注目したい。願かけから十年後、明治二十三年（一八九〇）の三月十五日、羅漢寺住職海野希禅から得度を受け、慧海仁廣の名を与えられる。出家してほどなく、希禅が突然隠退したため、住職代理を務める。翌年七月に正式に住職に任命されるが、翌二十五年の三月には僧籍を返上し⁽¹⁷⁾、この年の夏より非時食戒を開始している。では精進を中止した期間は、いつからいつまでだろうか。

精進生活十年という慧海伝の記事に従うと、満願の日（二十三年

十月二十五日）を待つて止めたように思われるが、実際は違うようだ。この年、慧海は得度を受ける直前に、両親から出家の許可を取りつけるため帰郷し、許されたとき、十年目に入った精進に区切りをつけ、友人たちと（久しぶりに酒を飲み肉も食べた⁽¹⁸⁾）というところである。青江は精進の再開を（願ほどき⁽¹⁹⁾）のときから（一年ぶり⁽¹⁹⁾）とし、奥山直司は（丸二年後⁽¹⁹⁾）としているが、両者とも羅漢寺の住職を返上した後のことと見ている点で一致する。慧海が僧籍を返上した年月日は黄檗山の「僧籍簿」に記載のあることが確認されているから、以上の経過を勘案すると、精進を止めていた時期は、得度した二十三年三月十五日の直前から、僧籍を返上した二十五年二月二十七日前後（非時食戒を始めた時を下限として、それより前）ということになりそうだ。自律を基本とする仏教の戒をあえて捨てたのが、皮肉にも自らの得度直前から住職を辞めるまでの二年間なのである。二十五歳から二十七歳にかけてのこの時期が、慧海にとつて制御不能の激動期であったことが別の面からもうかがえる。

青江は、帰郷して（願ほどき⁽¹⁹⁾）をした慧海が、（したたか酒を飲み（少年の頃から酒は強かった）肉を食い、そして遊んだ⁽²¹⁾）ことを（若い頃よく立ちよった寺の老婦人⁽²¹⁾）から聞き出し、異性に接した事実を仄めかすが、今のところ仮説の域を出ない。しかし、禁酒・禁肉食・不淫の三禁を解いたとき、（「不淫」だけを除く理由はない⁽²²⁾）ことも自明であろう。青江はまた、慧海の妹の竹野セイイからの聞き書きとして、チベットに出発したあと彼が残っていたものの中に、

〈小説らしいもの〉の原稿があり、若い僧が女に（誘惑されてこまっ
てしまい催眠術をつかってのがれるというすじ）であつたと記し、
（そんな経験がそのころあつた）⁽²³⁾に違いないと推測している。経験の
実否はともかく、彼がこの時期、小説や韻文を含む執筆活動に入れ
込んでいたことは確かである。

二十一年、哲学館（現東洋大学）に入学するため上京した慧海は、
羅漢寺境内にあつた溯源教会事務所に転がり込み、やがて「溯源教
会雑誌」の主筆進藤瑞堂に見いだされ、同誌に「人生の航海」（一八
八八・一〇）を発表したのを皮切りに、大内青巒の率いる尊皇奉仏
大同団（二十二年結成）の機関誌に執筆するようになる。尊皇奉仏
大同団は、十年代の欧化主義の反動から勃興した国粋主義を背景に、
〈キリスト教排斥運動を進める国家主義的な宗教・政治結社〉⁽²⁵⁾で、尊
皇思想と仏教の拡張を行動の目標としていた。慧海の門下生である
宗川宗満・服部融泰が編纂した『河口慧海師略伝並年譜』（一九二
七・二）によれば、二十二年に大同団の機関誌に論説や小説を含め
て十九編を執筆したとあるが、奥山は東京大学明治新聞雑誌文庫所
蔵の、二十二年ではなく、二十四年の「尊皇奉仏大同団報」（六月か
ら「団報」と改題）の中から十一編の所在を確認している。⁽²⁶⁾この機
関誌は現在希覓であつて、タイトルだけわかっている「小説妙居士」
なども確認できていない。しかし、判明している論説や小説に限つ
ても、その執筆時期が精進休止期間と重なる事実は注目に値する。
この時期に書かれた文章の中から、小説体のもとと文学に関連する

論説を追つてみよう。

「人生の航海」は、人生を航跡に類比した断章。悲恋をかこつ身を
〈捨小舟〉に見立て、〈末は淵瀬に沈むとも恋しさ増る玉章の雁の音
信待ちわびつ〉と嘆いて見せる朦朧体の美文で、恋愛をモチーフと
した初期の文章であることを割り引いても陳腐を免れない。

「諷警一章」（一八九一・四）は、この年の一月に起こつた内村鑑
三の不敬事件をモデルに、国家主義の立場からキリスト教の教理を
諷した戯文。仏教徒である母と妹が、兄の不敬の源にある信仰を批
判し、諫言するという二項対立の構図によって、仏教の優位を唱道
する。

文学と宗教の関係を論じた「吾国の文学と宗教」（同・八）では、
日本文学に影響を与えた神道・儒教・仏教のうち、仏教は〈吾国の
文学を形成せし至大要素なり〉と持ち上げる一方、一神教を標榜す
るキリスト教の教理は専制政治のようなもので、多神教的で〈神儒
仏の三大要素よりなる〉日本の文学とは背反すると批判した。当時、
機関誌の編集に関係していた慧海が、その挑戦的な内容の執筆活動
を通じて、大同団のプロパガンダを任じていたことが知られる。

キリスト教を排撃し、それを発条として仏教を高唱する論説の趣
意を、風刺的な寓意小説のスタイルで戯画化して見せたのが「心の
世界」（同・六、七、八）である。主人公の道野啓治郎は、洋行後、
仏教研究に専心し、最近は仏教の鼓吹とキリスト教攻撃の演説活動
によつて信奉者の尊敬を集めている。ある日、道野の演説に憤激し

たキリスト教系の壮士たちが彼の家に押し入って脅しをかけるはずが、居室に漂う、人も仏も（融解一体）化するような清廉な雰囲気と道野の人品骨柄を前にして萎縮し、さすが退散するというプロットで、主題が露骨なわりに人物描写の肉づけが足りないためリアリティが感じられない。ただ一点、演説を聞いた人物が再現する道野の主張には、見るべきものがある。現代人の道徳的退廃が、宗教の衰退とパラレルな関係にあると考える道野は、国家のためには仏教の振興こそが急務であることを説き、（仏教社会の道徳の頹廢は、

厳格なる戒律の反動である）から、（公然と肉食妻帯を許さざる各宗本山に忠告致したい）として僧侶の肉食妻帯を提言していることである。彼は自身の見解を著書として発表した後に出家し、その後、ある有力者の娘と結婚するといひ、出家後の方が（主義の表白に大ひに好都合）と嘯いている。主義とは、出家の身で肉食妻帯を實踐するの謂である。慧海はこの問題を、積尊の説いた（戒定慧の三学を修して、真実に菩薩道を行はぬ者は僧侶でない）と主張する守山則実と、時勢に合わせ（肉食妻帯して其人を強健にし。其子孫を増殖して。仏教を盛隆にすること。真実の仏教徒である）と主張する求理文治郎とが張り合う構図によって焦点化している。

道野啓治郎の名が、慧海のペンネームである（啓道と俗名の定治郎との組み合わせ²⁷）によって合成されていること、「心の世界」が仏教の隆盛を企図した一種の警世小説²⁸であることに鑑みると、肉食妻帯主義は当時の慧海自身の主張であったことがわかる。慧海伝によ

れば、精進生活を再開する二十五年、黄檗山の別峯院に籠もって一切藏経を読むうちに疑問を感じ、チベット行きを決意したという。慧海がその後、禁酒・禁肉食・不淫の戒、および非時食戒を一生守り通したことを考えると、捨戒期におこった反動や葛藤が容易ならざる様相であったことをうかがわせる。

3 女難

明治三十三年（一九〇〇）七月チベット国境の山巔に立った慧海は、岩と雪の高原を西北原に向かつて進み、遠方の雪山に遊牧民のテントを発見する。深山の方へ行くか、テントに向かうか迷った末、断事観三昧と名づけた観想の指示にしたがってテントへ向かう。判断に迷ったのは（道のない所から出てきた、怪しい奴だと疑われる）（二九）ことを危惧したためである。テントに着くと、別に警戒する様子もなく、老婆が快く迎え入れてくれる。それでも、この辺は巡礼の来るような所ではないが、と不審がるので、ゲロン・リンポチエのもとへ行くことと答えたところ、丁重にもてなされる。ゲロン・リンポチエは神通力を得て、（人の心に思うて居る事またこれはどういう人であるといふことを見分け）（同）るといふ評判で、西北原一帯で敬われている高僧である。

翌日、老婆の息子の案内で、白巖窟に向かう。尊者は骨格の逞しい七十位の白髪の老僧で、（一見してぞっとするような凄みのある人）

(二〇)である。慧海をじつと眺め、彼の人物を見抜いたかのように、(あなたはこういう所に来る必要はないが何のためにここにお越しになったか)と問う。仏法上のことをお尋ねしたいというのと、(一切の仏法はお前にあるので、私に尋ねる必要はない)という。こうした禅問答の末、慧海は大いに気に入られたものと見え、沢山の食料を与えられてマナサルワ湖を目ざして出立する。この時点で、慧海に尊者を再訪する意志があったかどうか不明だが、再会までに二度も女難に遇うとは意想外のことであつたに違いない。

あるとき、岡の向こうに数個のテントを見つけ、中から(チベットには稀なる美人)(二二)が出てきたので一夜の宿を乞い、厚遇をうける。彼女の夫は、もとはアルチュ・ツルゲー(アルチュの化身)と呼ばれる清浄な僧侶であつたが、破戒により墮落僧に変じている。見かけは寛大な善人で、財産もあり、気の利いた美人の妻をもつて結構な暮らし向きと見えたが、夫婦喧嘩が始まると、あにはからんや、(菩薩のような美人の妻君は夜叉のような顔になつて)(二三)夫に悪罵の限りを尽くし、狂気の沙汰としか見えない。放置できないので何とか女を宥め、二人を離すことができた。慧海はこのとき、妻帯して苦勞するのはチベットのラマばかりではない。日本の僧侶でも(これと同じような難儀を見て居ることだろうと思つて、窃かにその夜は涙を流し)(同)たという。慧海は夫婦喧嘩の傍杖を食つて、まるで我がことのように僧侶一般に同情しているわけだが、流した涙は共感のそれであるより、先年、僧侶の肉食妻帯を得々とし

て説いた我が身の軽はずみな言動を省みた慚愧の涙であつたかも知れない。もつとも、この程度ですめば夫婦喧嘩など話題にもならなかつたはずである。

巡礼中マナサルワ湖辺の寺に宿つたとき、慧海はこの寺の和尚から(驚くべき面白い話)(二三)を聞かされる。この湖の中でも有名な寺のラマ、アルチュ・ツルゲーが(美しい女を女房にして寺の財産を悉く女房の家に送つて、揚句の果てに残りの品物をすっかり纏めてどこかへ逃げてしまつた)(同)というのである。慧海は、手厚く遇してくれたラマが破戒僧というにとどまらず、美しい女に引かされて寺の財産を横領した悪党であると知つて驚愕する。和尚によれば、あのラマは表面的には慈悲深いように見えるが、菩薩の化身どころか悪魔の化身であつて、かえつてこういう殊勝らしいラマのなかにこそ悪魔がいると思つて涙したという。慧海はいよいよ驚いて、墮落僧といつても、このような不徳義漢は、日本社会にはあるまいと思つたという感想を残している。ラマ夫妻については後日の話があるが、それに触れる前に、慧海が経験したもう一つの女難の位相を見ておきたい。

聖地巡礼に出る前のこと、慧海は男女五人連れの巡礼者と知り合ひ、彼らに同行することになる。男兄弟三人と、上の兄の嫁、そして次兄の娘である。同行したのは、剽盜が出没するこの地域では女連れの巡礼者なら人を殺さないと聞いて心丈夫であつたからである。やがてこの巡礼たちが、強盜の本場といわれるカムの近くの人であ

ると知って心配になるが、今さら逃げ出す訳にもいかない。少なくとも霊場にいる間は強盗も狩りもしないから、まず殺される気遣いはないので、お説教によって彼らの心を和らげながら旅を続けると、危機は意外な方面からやってくる。連れのダァワという十九歳位の美少女に言い寄られ、結婚を迫られるのである。彼女の故郷では、ラマの妻帯は珍しくないこと、実家が富裕で、家に残る母親が慈悲深いことなど、好条件を示しながら誘惑するのだ。慧海は釈迦が、悪魔の大王が遣わした三人の娘の誘惑をいかに退けたかという故事を思い出して拒絶に努めるが、(どうやら小説的の境涯にあるような感じが起つてむしろ娘の心を気の毒に思) (三四) う始末で、煮え切らない。テントに二人きりになるとダァワはさらに攻勢をかけるので、面倒だと思いつつも彼女の口説きを聞いてやる。(まんざら樹の根や石の積で出来て居る人間でないから幾分か心の動かぬ事もない) からである。この段階でも、慧海は娘の誘惑をきっぱりと拒絶していない。後に回顧して、誘惑に乘じたりすれば(自分の本職に背く) ことになる上、(釈迦牟尼如来の見る前も恐ろしいという考え) から、(それがために一点も心の底の掻き乱されるといふようなことはなかった) (同) とあるのはさすがだが、どこか後知恵めいているのは争えない。当時、慧海は自分を誘惑する娘を論す趣意で、(愚かにもまして愚かになりなまし色にすゝめるさかし心を) という歌を書き留めているのだが、そこには自戒が込められていなかったかどうか。

しかし、ラサ行きを使命としている彼には、ダァワを説得する以外に選択の余地はない。ほとほと彼女を持って余した慧海は、窮余の一策で、彼女の母親の安否を知っていると思わせ振りに出ると効果できめん。ラマには神通力があるというチベットの俗信につけこむことで、半信半疑にさせ、彼女の恋慕の情に水をさすことに成功する。こうして慧海は、辛うじて女難を逃れたのである。だが、危機はこれだけではなかった。

霊地巡礼が終われば、お別れである。同行の巡礼者は、霊場から離れるので、いよいよ本業の狩猟に出かけるといふ。狩猟の解禁とは、強盗や殺人の解禁をも意味する。あまつさえ、(あのラマが俺の姪の婿に成らないようであれば、屠つて喰物にする) (三九) という彼らのおぞましい企みを聞くともしに聞いてしまう。そのときの慧海の驚愕と恐怖はいかばかりか、察するに余りあるが、意外なことに、彼には(危急の場合) という認識はあったが、殺されることへの恐怖感希薄である。

我が戒法を守るといふことのために殺されるというのは実にめでたい事である。これまでは幾度か過ちに落ちて幾度か懺悔してとにかく今日まで進んで来た。しかるにその進んで来た功を空しくしてここで殺されるのが恐ろしさにあの魔窟に陥るといふことは我が本望でない。(同)

不淫の戒を破り(魔窟に陥る)ことは御免こうむりたい。近くにはアルチュ・ラマの失敗の実例もある。(幾度か過ちに落ちて幾度か

懺悔して」という表現には、慧海の過去を生々しく彷彿とさせるものがあるが、これまでやつとの思いで乗り越えてきた色欲の難題に負けては元も子もないという思いは切実である。殺されることは、もとより恐怖である。にもかかわらず、それをなお「めでたい事」といえるのは、宗教家としての開き直りのゆえであるとともに、破戒が殺されるより怖いという逆説の切実さにおいてである。

翌日、男たちが狩猟に出払ったすきに、ダァワが「酷い事」を聞いたと注進に及び、選択の翻意を促すが慧海は肯んじない。霊場を巡り本望を遂げた以上、死は厭うところではない。「極楽浄土のなたからお前たちが安楽に暮せるように護ってやる」と称して、彼女の説得を決然と斥けるのだ。慧海が死を覚悟して決断したとき、同時に彼は色欲の難題からも解放されたと見られよう。

この後、狐から帰った末の弟が、たまたまその場の様子を見とがめて娘に小言をいったため、彼女の父親が弟に食ってかかり、あげくは兄弟三人入り乱れての大乱闘となる。止めにはいった慧海まで殴り倒され、娘も泣き出し女房も泣き出し、「落花狼藉」の修羅場となる。翌日は、仲たがいがいった兄弟が別々の方面に行くことになり、慧海はこれを奇貨として彼らとは異なる東南の山中に進んで事なきを得る。以上が女難にまつわる経緯であるが、深刻な事態にありながら、慧海の語り口のせいにか、どこかユーモラスな気配が感じられるのは一得といえよう。

こうして難を逃れたのもつかの間、二度も追剥に遇ったり、飢渴

に苦しみなながら大雪の中を進み、雪の反射で依雪眼病を患うなど、にっちもさっちもいかなくなる。このときは、助ける人があって九死に一生を得るが、猛犬に足を噛まれる不運が重なって、ついに立つこともできなくなる。この辺にアルチュ・ラマが居るはずだがと尋ねると、案内する人があつて送ってもらったところが、着いたのは見覚えのあるラマのテントではなく、奥さんの親の家だという。仲たがいで実家に戻っていた奥さんが、慧海のために人をつけてラマのもとに送ってくれる。こうしてラマと再会した慧海は、彼らのために「夫婦和睦の仲裁」(四四)を買って出て、何日か無量寿經の五悪段の講義を続けると、彼らはその度に涙を流して自分の罪を懺悔し、和諧することができた。こうして夫婦ともに救済されるのだが、わけてもアルチュ・ラマは、慧海の感化によって僧侶の矜持を取り戻したとおぼしい。慧海の疵も癒え眼病も治ったとき、ラマと一緒にゲロン・リンボチエを訪ねることを提案している。参詣を終えて帰ろうとすると、尊者が慧海に話があるというので、ラマ夫妻とはここで別れる。

尊者が慧海を引き留めたのは、彼がチベットの国情を探るスパイであるという噂を憂慮したからである。何のためにラサへ行くのかと問われた慧海が、「仏道修行をして一切衆生を済度しようため」(同)と答えたため、両者の間に形而上的な宗教問答が白熱する。すると尊者はにこりと笑って唐突に問を変え、「あなたはこれまで色欲のために心を苦しめた事がありますか」と尋ねる。慧海の弱点を衝

く不意の問いかけに、以前の彼なら大いにたじろいだかも知れない。しかし、この難題はすでに克服されている。(かつて大いに苦しんだ事がありました、今はどうやら免れたようでありませう。また全く免れんことを希望して居るものである)と正直に答え、関門を乗り越える。尊者はその後、一切衆生済度が目的ならネパールへ帰れと勧めたり、旅を続けられ殺されると威したり、問答を延々とくりかえしたあげく、ついに疑念を氷解したに違いない。尊者は喜悅して、(全くあなたは信実に仏教を求めの方である)(四五)と認定した上、旅中に必要な物品を大量に施している。以上の経過が示すように、慧海はゲロン・リンポチエによって徹底的に人間を試されたのである。それは、スパイの嫌疑を晴らすという形而下的な理由からではない。求道者としての真贋が試されたのである。慧海の人物を見極めた尊者が、彼にチベット仏教の奥義(マニの秘密法力)をひそかに授けているのは、免許皆伝というわけであろう。

慧海における女難、あるいは色欲の問題については、ツァーランの滞在期にその伏線がある。ヒマラヤの山岳地帯にあるこの村は、清浄な空気や夏冬の幽邃な風光とは裏腹に、人々は聖俗ともに淫風にまみれている。(女に戯れ肉を食い酒を飲む)(一二)のは俗人ばかりではない。僧侶はチベット仏教の旧教派に属するので、肉食妻帯も子どもが生まれないかぎり破戒とはならない。村人の病気を診たり、読書や座禅の外は瞑想に没頭する慧海の常住が知られて村の評判になると、彼の永住を希望する村人が増え、そういう村人の意

を体して、彼に妻を持たせようとしたり肉食に誘惑するギャルツァン博士のような人物がいるが、慧海はその手には乗らない。しかし、ツァーランでのこうした見聞に触発されたからであろう。慧海はそれ以降、チベットの男女関係のあり方や結婚制度、旧教派の淫猥な仏教理論に、好奇心とともに批判的な関心を寄せていくことになる。多夫一妻が夫婦関係の常態となっていた当時のチベットにおいては例外的な、一夫多妻のカルマ家の事例を記した「一妻多夫と一夫多妻」(二四)や、旧教派に属するサッキヤア寺の住僧を、(肉食妻帯、飲酒)(五四)を肯定する教義のゆえに俗人と見なすエピソード、「婚姻」(八〇)、「多夫一妻」(八三)の実例の記録などは、そうした観察の成果といえよう。

4 おわりに

『旅行記』には様々な困難や辛苦が語られながら、どこにも(近代人の恐怖感が入っていない)と指摘したのは伊藤剛であるが、そこには恐怖感ばかりか、孤独感も感傷的な詠嘆もない。慧海を卓越した求道者と評価する既成のイメージから演繹して、仏教や釈迦への絶対的帰依による菩提心のゆえと考えると見やすいが、そればかりではなさそうだ。

すでに述べたように、慧海は飢渴と依雪眼病に悩みながら雪中を進み、九死に一生を得たことがある。このとき、身体が凍えて痺れ

てくるという命の瀬戸際で、不意に歌が出てきたため苦痛が和らいだという体験を書いている。自分の作った（歌の面白みに自分と自分の心を慰め）、（大和言葉の国風の有難い事、かかる困難の時に人を慰めるものであるということを実験した）（四三）という。それは、（雪の原雪の褥しよねの雪枕雪をくらひつユキになやめる）という歌で、（ゆき）という音の語呂合わせと、（ユキ）が（行き）と（雪）の掛詞になっているレトリックが目立つだけの変哲もないものである。しかし、ここでは歌の巧拙は問うまい。歌を詠むという営為によって、尋常でない苦痛や困難を乗り越えることができたとするれば、それだけで驚異というべきで、歌の巧拙など二の次でしかない。むしろ、こうした痛快な挿話から透けて見えるのは、天成の楽天家である慧海の、人物としての魅力である。

さて、慧海の女難の話には続きがある。ラサに到着後セラ大学で修行していた慧海は、医薬に多少とも心得があったことから僧侶や俗人の病気を治し、貧民に対しては礼物を取らないという噂が評判となって、声名はラサ市中から地方にまで喧伝された。やがてチベット法王の招きを受け、侍従医長に推挙するという話がおこったため、セラ大学では学生である慧海の待遇を変えざるを得なくなる。

ある雪の日、セラ寺の小僧たちが無邪気に雪合戦をしているのを乗馬姿で見ていると、後からやってきて下からじっと見上げている男がいる。男は西北原で巡礼を共にした三兄弟の末の弟で、慧海を殴り倒した男である。彼は、慧海がかつての薄汚れた巡礼ではなく、

（堂々たる貴族の風をして馬に乗って居るのを見て）（八六）恐れをなしたのか、視線をそらして向こうへ行こうとする。慧海は男を呼び止めてセラ寺に案内し、ご馳走した上に土産物まで持たせ、先年の礼を述べたところ、男は罪を悔いる様子で涙を流したということである。聞けば、離れ離れになっていた三人兄弟は、その後、一緒に帰郷し、皆無事に暮らしているという。

これは、出来過ぎた話であろうか。あるいは、威風堂々の晴れ姿で相手を威圧し、一方で恩恵を施す慧海の遣り口に偽善を読むことも可能かも知れないが、おそらく違う。『旅行記』中で慧海がしばしば驚嘆するのは、チベット人一般の（仏陀に対して自分の罪業を懺悔し自分の善業を積む）（二三八）妄信といってもいいような熱心な信仰力である。未来の悪事を懺悔する悪漢の実例さえ記録されている。してみると、男のように強盗を生業とするような人物にも仏心を見て、再会を教化の好機ととらえた可能性は十分考えられる。カイラス山巡礼のため、二カ月にわたって寝食を共にした彼らとの交流は、路辺の人とのたまさかの付き合いではなかったからである。一連の女難の挿話は、人との交流という言葉が本来もつ興行きを示して見事というほかない。慧海はチベットでは、法王ダライ・ラマから政府の高官、一般人、巡礼、乞食に至るまで、さまざまな階層の人々と接触交流しているが、それをもって誰にでも可能な交流の在り方というわけにはいかない。

注

- (1) 根深誠『遙かなるチベット―河口慧海の足跡を追って』(中公文庫、一九九・一)
 - (2) 杉浦明平「記録文学の伝統と現代における問題点」(杉浦明平・村上一郎編『記録文学への招待』南北社、一九六三・四)
 - (3) 高山龍三「河口慧海―人と旅と業績」(大明堂、一九九・七)
 - (4) 実際には、新聞での連載は、チベット国境の山頂に立つあたり(『旅行記』一七)から開始する。直前までの各紙による取材合戦で、慧海がすでに国境までの経緯を語っていたからである。
 - (5) 杉浦明平「大航海記のたのしみ」(図書一九六五・七)
 - (6) 一例をあげると、ヒマラヤのビチャゴリに泊まった日、(夜の十時頃日記を認めつつ荒屋の窓から外を眺め)(七)、虎の咆哮を聞くという記事がある。また、ダーズリンからラサまでの行程を振り返り、チェックポイント毎に年月日と距離を具体的な数値で示す記事(二三八)があり、メモの所在をうかがわせる。
 - (7) 川喜田二郎「記録と紀行と真実と」(中央アジア探検紀行全集、第五巻『ヘデイン』月報、白水社、一九六五・九)
 - (8) 青江舜二郎「ヒマラヤ初越えの日本僧―知られざる世界的探検家河口慧海の偉大と悲惨」(『文藝春秋』一九六〇・一一)
 - (9) 「チベット学の祖波乱の日記―東京で発見」(『朝日新聞』夕刊、二〇〇四・一一・二四)
 - (10) 宮田恵美「実行の人・河口慧海」(『フォーラム堺学』一九九七・三)によれば、慧海は「毎日かかさず日記をきちんとつけていた人で、(中略)没後、膨大な量の日記が残されて」いたという。
 - (11) ラサからの脱出行の途次、ゲンバラの絶頂に達したときの記事に、(道中記はなるべく簡略にしてくれろという御注文もあり、かたがた省き得らるるだけは省く方針を執りました)(二二八)とあり、簡略を旨とした
- (12) 執筆方針にふれている。
 - (12) 高山龍三編著『展望河口慧海論』(法蔵館、二〇〇二・一一)
 - (13) 金子英一「チベット旅行記」(『河口慧海著作集』第一巻、うしお書店、一九九八・一二)
 - (14) 河口正「河口慧海―日本最初のチベット入国者」(春秋社、二〇〇〇・二)
 - (15) (10)に同じ。
 - (16) 春名徹「河口慧海」(『信仰と精神の開拓者』第九巻、ティビーエス・ブリタニカ、一九八三・一一)
 - (17) 正満英利「河口慧海についての一考察―得度の師希禪和尚の資料から」(『黄檗文華』一九九七・四)は、黄檗山の『僧籍簿』から、慧海が明治二十四年七月九日に正式に住職に任命されたこと、僧籍返上が同二十五年二月二十七日であることを確認している。
 - (18) (14)に同じ。
 - (19) 青江舜二郎「河口慧海」(国士社、一九六七・一〇)
 - (20) 奥山直司「評伝河口慧海」(中央公論社、二〇〇三)
 - (21) (8)に同じ。
 - (22) (20)に同じ。
 - (23) (19)に同じ。
 - (24) 青江は、慧海が羅漢寺の住職をしていた頃、(境内に花屋が住んで居て、その姉娘がある晩凶器で殺され、嫌疑が慧海にかかったという話)「もっと慧海を―すばらしいチベット旅行記」(『世界ノンフィクション全集』第六巻、筑摩書房、一九六〇・八)を記録しているが、関連を含め真偽のほどは確認できていない。
 - (25) (20)に同じ。
 - (26) (20)に同じ。ただし、明治二十四年一月以前の「尊皇奉仏大同団報」や、二十五年三月以降の「団報」については確認できていないので、今のところ、これ以上のことは不明。また、大同団の別の機関誌に「大同新報」があるが、国会図書館所蔵の同誌(明治二十二年五月―二十三年

七月) 第一号から三十一号の内、欠号の四号、十一号、二十二号を除く
記事中に、慧海が執筆したと見られる記事は確認できなかった。

(27) (20) に同じ。

(28) 「心の世界」の「はしがき」に、(前代未聞の一大文書を書し。世の人の夢を醒まし。尋常一様の小説家の。惚れたとかはれたとか云ふ血迷言を解かん)と、その心意気を示している。

(29) 伊藤剛「河口慧海の生涯と思想」(『中央公論』一九六九・一二)

(30) 伊藤の他、森まゆみ「河口慧海の根津宮永町雪山精舎」(『明治東京崎人伝』新潮社、一九九六・一)、高田宏「生死の境を行く旅―河口慧海の『チベット旅行記』」(『旅の図書館』白水社、一九九九・一二)にも同様の指摘がある。

*なお、『旅行記』本文からの引用は、全て講談社学術文庫版『チベット旅行記』全五卷(二九七八・六、七、八、九、一〇)による。